068　蓼科山　040919
◎友人 5 人と蓼科観光に来ている、友人の別荘にお世話になっている。「ちょっと　わがまま　山に登りたい」友人たちは小布施方面に観光、別荘から 20 分ぐらいの“スズラン峠：女の神茶屋”にある登山口まで送ってもらった。「5 時に　また迎えに来る」という言葉に送られ登山口を登り始めた。
◎朝、別荘の窓から正面に見える蓼科山には雲がかかっていたが、景色は多少の霞に陽も照っている。「晴れてほしいねえ」と車の中でも照ったり曇ったり、歩き始めると、どんよりとした天気になってきた。一本目はなだらかな草原、低木が茂った森と開けた場所が交互にあらわれ、笹も茂っている、爽やかな景色だ。
◎1 時間歩いた。山の様子が変わり始め、樹が針葉樹になりだした。シラビソかダテカンバかなんという名の樹か、岩がではじめゴロゴロ岩の間を歩くようになってきた。谷筋ではないけれど降れば水が流れる岩の道、濡れて湿っている。天気もいよいよ暗雲がたちこめてきた。
◎“視点見出し杭”名前を聞いたことがないま新しい白い杭を 2 か所で見た。調べたが専門すぎてわからない。これらを打ったおっさんたち、夏の比良で五六人が、作業服にヘルメット、編み上げ長靴にザック、手には杭を持ち、「こんなところを下るの？気をつけて」と歩いて行った。「我々は　遊び　登山で　ごめん」である。
◎半分ぐらいは登ってきたのか、コースタイムは、3 時間ぐらいになっている。緩やかなところもあるが、岩ゴロゴロの濡れた道、樹が味方だ、幹を、枝を、根をつかみ登っていく、岩を滑ると大怪我だ。今にも降りそう、霧が目の前を流れる、これは雲なのか、湿度は相当高いだろう。
◎蓼科山は八ヶ岳連峰の北の端っこ、独立峰のように立っている。八ヶ岳連峰は火山活動で出来上がった山々のようだ。昔話:山を作る神様に二人の娘がいた。富士山を作って一人を住まわせた。もう一人には浅間山を作って住まわせようと、諏訪の土をごっそり運んだ。諏訪の土地には大きな穴があいてしまった。蓼科山は八ヶ岳の妹でした。手ですうっとなぜたようななだらかなやさしい姿から諏訪富士とも呼ばれていました。兄さんの八ヶ岳が富士山に蹴飛ばされてから、日々泣いていました。涙を流し泣きじゃくったので、一筋の川になり、諏訪湖ができました。
◎半そでシャツだったが、ポツリと降り出したので、ヤッケの上下を着た。大阪でも、一週間ぐらい前から熱帯夜がおさまり、夜も涼しくなってきて布団を出して寝ている。さすが信州の高原地帯、部屋では半そでシャツで過ごせるが、雨が降りそうな山の中、2000Mを超えると風が冷たい、耳が痛い、ヤッケのフードを被った。
◎コースタイムでは 2 時間半とも 3 時間とも書いてある。麓から見ていた山の姿から、なだらかな登りが続いてふっと頂上に至るのかなと思っていたが、なかなかどうして、簡単には頂上に到着しない。森林地帯が終わって、大きな岩がゴロゴロ出てきた。上を見上げると、かすか遠くのほうまで岩が続いている。天気が悪く視界が低い、上もまわりも見通しがきかない。風も吹いてきた、なんだか嫌な予感もするが登る。
◎3 時間で山頂にやってきた。途中、吹き飛ばされそうなきつい風が吹きはじめ、かすんで十二十 M 先が見えない、3 点確保でそろりそろり進んでいく、オレンジ色の棒が所々にさしてある、くさりをつかみ岩をつかみ、進んでいく、なんと小屋らしきものがでてきた。すぐそばの、やや平らな山頂もゴロゴロ石で、まっすぐ立っていられない、それでもたくさんの人がいた、反対側から登ってこられたようだ。
◎こんなところは長居は無用と下り始めた。慎重に慎重に風が吹かないところまで下り休憩した。
◎大失敗をやらかした。疲れたので 30 分ピッチで下っている。濡れた石の下りを慎重に下っている、5 時に登山口だが、このペースでは 4 時前には着いてしまうとゆっくり歩いている。「へ　あ　ザックがない　まさか忘れた」なんと今までいろんなものを忘れてきた、いちばん多く忘れたのはストック、だがまさかザックを忘れるとは、まさに瘋癲ジジイである。「30 分下ったのを　上り返す」「何が入っている」「もう　いつ　廃棄処分してもいい　ザック　パン　水・・」「たいしたものは入っていない　あきらめるか」と自問しながらも、身体は登り始めた。急いで下ると怪我をするような斜面、登るのも下りと同じような時間で登れた、「おお　ザック君　オレが座った石の横　おろしたままの姿で、土の上に横たえわっていた、むろん感激の再会である。
◎登山口あたりは晴れている、明るい空、4 時半に着いた。10 分ぐらいで迎えに来てくれた。

069　古事記－Ⅱ　070919
◎黄泉の国から戻り、穢れを洗い流したイザナキは、左目を洗ったときに成り出たアマテラスに、「そなたは神々のいます　高天の原を　治めなさい」右目を洗ったときに成り出たツクヨミには、「夜の国を　治めなさい」鼻を洗ったときに成り出たスサノオには、「海原を　治めなさい」といった。スサノオだけは、ゆだねられた国を治めようとはせず、哭きわめいた。その泣きわめくさまは、青々とした山が枯れ、河や海はスサノオの涙が流れ干上がった。蠢く悪神たちが満ち溢れ、災いが起こり広がった。イザナキはスサノオを追い払ってしまう。
◎イザナキは、今は身を隠し、淡海（近江）の多賀神社に葬られている。
◎父イザナキに追いやられたスサノオは姉アマテラスに別れを告げようと、高天の原に昇ってゆく。その荒々しさは、山川がどよめき、国や地がことごとく揺れるほどだった。アマテラスはその音を聞き、驚き恐れ、弟スサノオが昇ってくるのは、高天の原を奪いに来たと思った。アマテラスは男の姿になり、髪を解き、背に矢筒を背負い、手に弓を握り、足を踏みしめ、雄叫びを上げた。「いかなるわけで　昇ってきた」「姉上に　お暇乞いをしようと　昇ってきました」
◎「あなたの清き心は　どうして知れる？」「宇気比（占い）をして子を産みましょう」
◎「宇気比（占い）をして子を産みましょう」これはわからない神話の世界。これによっていくつかの神々を成り出た。スサノオは、「わたしは　手弱女（たわやめ）を生み出したので　私の勝ち」といった。
◎スサノオは勝ちにまかせて、田の畔をつぶし、御殿に糞を撒き散らした。次いで、機織り女のいる機織り屋に逆剥ぎしたまだら馬の皮を堕としいれた。ひとりの機織り女が驚き恐れ転び落ち、梭（ひ:横糸を通す道具）で秀処（ほと）を衝き刺し死んでしまう。
◎さすがのアマテラスも、天の岩屋の戸を開いてその中に閉じこもってしまう。高天の原はもちろん、葦原の国もことごとく闇に覆われ、上も下も永遠の闇の夜が続いた。悪しき神々の騒がしい声が満ち溢れ、恐ろしい災いがいたるところに広がった。困り果てた八百万の神々は、オモヒカネにアマテラスを引き出す知恵を絞らせた。
◎思慮の神オモヒカネはまず、常世の長鳴き鳥（にわとり）を鳴かせ、夜明けを告げる。そうしておいて、天の安の河にある堅い石で玉飾りを作らせ、天の金山にある鉄を掘り出させ、鍛冶屋に命じて鏡を作らせた。男鹿の骨を焼いて占いを、大きな榊の木を引き抜き、勾玉を、鏡を、白和幣、青和幣（にきて：神に供える布）を垂らし、祝詞（のりと）を唱えた。力持ちの神が、アマテラスが籠る天の岩屋の戸のわきに隠れた。
◎アメノウズメが、天の岩屋の前で桶の上に立ち、足踏みをして音を響かせると、しだいに神がかりとなり、乳房を掻き出し、解いた裳のひもを秀処のあたりまで押し垂らした。見ていた八百万の神々は、心から満足し喜びの声を上げる。
◎外の騒ぎを聞きつけたアマテラスが不思議に思い、「高天の原も　葭原の中つ国も　暗いはずなのに」アメノウズメが「あなた様より　貴い神が　いらっしゃるので　みな喜んで　歌い　踊っています」顔をのぞかせたアマテラスに鏡を差し出すと、アマテラスはますます不思議に思い一歩踏み出すと同時に、アマテラスの後ろにしめ縄を張り渡し、天の岩屋からアマテラスをみちびきだした。
◎アマテラスがお出ましになると、高天の原も、葭原の中つ国も、おのずと照り輝きみな明るい光に包まれた。八百万の神々は相談をして、スサノオに償いの品を出させ、穢れを払い、高天の原から追いはらってしまう。

◎イザナキ（伊邪那岐）とイザナミ（伊邪那美）本居宣長はイザナを誘う、ギは男、という。初めて、男と女の形になった神である二人は、愛と死、そして憎悪の別れ、というドラマ。
◎アマテラスは天照大御神となり、日本神話の主神として日本を照らす女神。太陽神であり巫女の性格を持つ。当時の大和朝廷の氏神がアマテラスといわれる。
◎この話にはエロチシズムが満ちている。鍛冶屋の名前が：カヌチアマツマラ、このマラは男根だと南方熊楠が言っている。そのマラを堅くするのが、イシコリドメという女神。鋳込んだ鏡は固く立派なものになった。アメノウズメの舞も男神たちを歓喜の渦に引き込む演技は、ストリップショウである。

070　古事記－Ⅲ　080919
◎高天原から追われたスサノオは、さまよう道中、オホゲツヒメに食べ物を求めた。オホゲツヒメは、鼻や口や尻からさまざまな食べ物を取り出し、それを作り調えてもてなしたが、その様子を覗き見たスサノオは、わざと汚していると思い、怒ってオホゲツヒメを切り殺してしまう。すると、殺されたオホゲツヒメの身につぎつぎにものが生まれた。頭には蚕が生まれ、二つの目には稲の種が生まれ、二つの耳には栗が生まれ、鼻には小豆が生まれ、陰（ほと）には麦が生まれ、尻には大豆が生まれた。その様子を見ていたのが高天の原にいますカムムスヒで、それをスサノオに取らせて、実のなる草の種となし、あらためてスサノオに授けた。
◎スサノオは、遠ざけられ追われ、出雲の国、肥の河（斐伊川）のほとりに降り立った。箸が流れてきたので、人が河上に住んでいることを知り、流れを遡り尋ねてゆく。すると上流には、老いた男と女がおり、若い娘を中に置いて泣いていた。
◎「おまえたちは誰か」「娘は　クシナダヒメ　といいます」「おまえたちはなぜ　哭いている」
「娘が八人いたのですが　高志の八俣の遠呂知（こしのやまたのおろち）が　毎年一人ずつ　喰ってしまいました」「今また　そやつが　来る時が近づいたので泣いているのです」「そやつの姿は　どんなか」
「その目は赤加賀智（熟れたホオヅキ）のように赤く燃え　体一つに八つの頭と八つの尾があり　その体には苔や檜・杉が生え　長さは　谷を八つ尾根を八つも渡るほどに大きく　その腹を見ると　あちこち爛れていつも血を垂らしております」
◎それを聞いたスサノオは、「娘を　わたしに　くれるか」と聞く。「あなた様の　お名前も　知りません」
「わたしは　アマテラス大御神の　母をひとしくする弟だ　今まさに　高天の原より降ってきたところだ」
「それほど　貴い方とは恐れ多いことです　娘を差し上げます」
◎こうして、遠呂知退治をすることになったスサノオは、すぐさま、クシナダヒメを美しい櫛に変え、みずから角髪（みずら）刺し隠し、爺婆に、「幾たびも幾たびも　繰り返し　醸した強い酒を作れ」「垣根を作りまわし　その垣に八つの門を作り　八つの門ごとに桟敷を設け備え　その桟敷ごとに酒船を置き　その酒船ごとに　幾たびも醸した強い酒を溢れるほどに満たして待て」
◎教えられたとおりに備え待ちうけていると、八俣の遠呂知が、爺の言葉通りの姿でやってきた。そして、自分の八つの頭を酒を満たした船のなかに突っ込んで飲み干し、酔って寝てしまった。それを待っていたスサノオは、腰に下げた十拳（とつか）の剣を抜き放つと、その蛇をたちどころに斬り刻む、その血で、肥の河は赤く染まって流れた。
◎遠呂智の体内から剣が出てきた。それはどう見ても、恐れ多く妖しい太刀なので、高天の原にいますアマテラスのもとに差し上げた。それが草那芸（くさなぎ）の太刀（三種の神器のひとつ）八咫鏡：やたのかがみ　八尺瓊勾玉：やさかにのまがたま　天叢雲の剣：あまむらくものつるぎ）
◎スサノオは約束通りにクシナダヒメを妻として、宮を作るのにふさわしい場所を探し求め、須賀の地（島根県雲南市）に到ると、「わたしはここに来て　心がすがすがしくなった」と仰せになり、そこに宮を作って住むことになった。たくさんの神が生まれた。子孫に、オホクニヌシがいる。

◎スサノオが出会う、オホゲツヒメに食べ物を乞い、汚いと殺してしまう。亡骸から出てきた五穀の種が出てくる。高天の原でスサノオの所業を見ていたカムムスヒがその種を、持ってこさせ穢れを払いスサノオに授けた。カムムスヒは神々の苦難や危険が生じるたびに姿を見せる祖神です。オホゲツヒメ殺すという非道からスサノオを救い、芦原中つ国の稲作起源となる。また、妻となった、クシナダは水田の意味だそうです。
◎ヲロチの正式名称は、高志之八俣遠呂知です。目は熟れたホオズキのように真っ赤、身体は一つで頭と尾が八つあり、胴体には苔や杉檜が生え、長さは谷や尾根を八つ跨ぐ、腹からいつも血を流している。ヲロチの正体は、これはまさしく、斐伊川の姿です。川の河口と支流の流れ、あちこちでの土砂崩れ、自然神として川の神なのです。高志は広く北陸地方を指します。

071　古事記－Ⅳ　110919
◎オホクニヌシには八十（やそ）を余る兄弟の神がいた。その神々は稲葉のヤガミヒメを妻に娶りたいと、オホクニヌシに袋を担がせ、そろって稲葉に出かけた。皮を剥がれた赤裸のウサギが倒れ臥せっているのを見て、八十の神々が、「塩水を浴び　臥せっているとよい」と教えた。みるみる塩が乾き、薄皮が裂けた。オホクニヌシは、ウサギが痛み苦しみ泣き臥せっているのを見て、「今すぐ河口に行き　真水で体を洗い　蒲の穂を敷き　横たわっていれば治るだろう」その通りにするとウサギの体は元通りに治った。
◎教科書にも載っていた稲葉の白兎の話。淤岐の島に住んでいたウサギはこちらに渡りたいと考え、海に住む和邇をだまして、「数競べをしよう　この島から　気多の岬に向かって　並び伏して連なってくれ」とその背の上を走って、今一足で地に降りようとしたとき、「君たちは　わたしに　だまされたんだよ」といった。もっとも岸近くに伏していた和邇がウサギを捕まえ、河を裂き剥いだのでした。
◎助けられたウサギは、「八十の神々は　ヤガミヒメを手に入れられない　あなたさまが　妻になさるでしょう」兎神のお告げ通り、ヤガミヒメはオホクニヌシに嫁ぎたいといった。
◎その言葉を聞いた、八十の神々は、オホクニヌシを殺してしまおうとした。
◎八十の神々は、オホクニヌシを伯耆の国の手間の山に連れ出し、「赤い猪がこの山にいる　我々が皆で　猪を追い落とすから　下で待ち受けて捕まえろ」と言って、猪の姿に似せた大きな石を焼いて転がした。オホクニヌシは焼けた石に押しつぶされ死んでしまった。
◎それを聞いた母神は、殺されたわが子を見て哭き悲しみ、すぐさま高天の原まで飛び昇って、祖神カムムスヒ（スサノオがオホゲツヒメを殺した時に出てきたオヤジ神）願った。遣わされた神は、オホクニヌシの骸を岩から剥がし、焼けただれた体に薬を塗ると、元の通りに歩いて遊びまわった。
◎八十の神々はますます怒り、ふたたびオホクニヌシを山の中に連れていき、大きな木を切り倒して縦に中ほどまで切れ目を入れ、割れ目に楔を打ち込んで、そこにオホクニヌシを閉じ込め、楔を外した。太い木の割れ目に挟まれ、生き絶えた。またもや母神が現れ、すぐさまその木を二つに裂いて取り出し生き返らせた。
◎母神は、このままではいつかわが子が殺されると思い、木の国（紀の国－和歌山県）まで逃がしたが、八十の神々は探し求めて、木の国までおいかけ、弓に矢をつがえオホクニヌシを出せと迫った。そこで木の俣からこっそり逃がし、「スサノオのいます　根の堅洲の国に　おいでなさい」と告げた。
◎教えられたとおりに木の根を通って、スサノオのもとに行くと、娘のスセリビメが出てきて、たちまち二人は結ばれた。＜スサノオの娘と出会って、すぐに結ばれる？　スサノオが、なぜまたここで、登場する？＞
◎スセリビメが、「とてもうるわしい方がいらっしゃいました」とスサノオに言うと、殿のうちに呼び入れ、蛇の室屋に寝かせる。妻のスセリビメ＜もうすでに、妻なのか？＞が、「もし蛇が喰おうとしたら　この頭巾を三度振って打ち払いなさい」次の日には、百足と蜂の室屋に入れられた。またもや、スセリビメが頭巾を授け、朝になると健やかに室を出た。スサノオは次に、鳴り鏑矢を大きな野に射込み、それを探させた。オホクニヌシが野に入ると、まわりから火をつけた。逃げられないでいると、ネズミが足元に来て、「内はほらほら　外はすぶすぶ」と聞こえる。足元を踏みつけると、ドスンと下に落ち、火は頭の上を通り過ぎて行った。ネズミが鏑矢を渡した。
◎妻スセリビメは、夫が死んだと思い、葬式の用具をもって、哭きながらやってきた。スサノオも婿は死んだと思って立っていた。そこへオホクニヌシが鏑矢をもってやってきた。スサノオは心を許し、大きな室屋に呼び入れ、頭の虱を取らせた。＜なぜ　虱？　猿のような・・＞＜スサノオの頭の上を百足が這いまわる・・？＞
◎オホクニヌシは眠っているスサノオの髪の毛を垂木に結び付け、妻のスセリビメを背負い、スサノオの、生太刀と生弓矢、天の詔琴（あめののりごと＝祭具）をもって逃げ出す。髪の毛をほどき終えたスサノオは葦原の中つ国につながるところまで追いかけ、オホクニヌシに呼びかける。
◎おまえの持っている、生太刀と生弓矢は八十の神々を追い払い、芦原の中つ国を治めるだろう。わが娘スセリビメを正妻として出雲に、土深く宮柱を太とぶとと突き立て高天の原に届くまで氷木を聳やかして住むのだ。
◎スサノオに祝福され、「大国主」の神となって、葦原中つ国を統治し、初めて国をお造りになった。

072　ぼやき　140919
◎友人の衣川さんが、怒らないで聞いて、岡村ブログの愛読家より、と言って下記のようなメールが来た。
◎岡村さんのブログが自分の考えを確立する、その下書きというか、メモ書きならばそれでいいのですが、世間に自分の思いを伝えたいという意志があるなら、今の内容ではよくない。話が長くて退屈なんですね。ブログは岡村さんがメモ用紙のように言いたいことを書くことにより、自分の考えを整理しているということなのでしょうか。何かを考えているときに、それを文章化するなかで、自分の考えをはっきりさせるということは、文筆家の取るある手法です。

◎ブログという日記をつけ始めて、8 年になる。「よし　ブログを始めるぞ」という宣言をしてネットに出し始め、やっとのことで、三日坊主の日記から脱出できた。他の人を意識してネットに乗せるということで長続きしてきた。途中から、ページ一枚を使い切らなければという意識が芽生え、爾来ずっとそうしている。これはなんだかオレの人生の中にある、決まり事というか、性格というか、何かに引きずり回されねば自身が折れてしまうというか、わけもなくそれを続けている。毎日走ることもそうだ。絵を描くこともそうだ。なにかの力に突き動かされなければ、オレは止まってしまうのかもしれないね。

◎文章の話、実は気に入っている文章がある、この十年で一番素晴らしいと思っているので、紹介するが、多分万葉仮名か漢字で書かれていたものだろうと想像する。山上憶良の長歌、今風の読み方、しかも横書きになってしまうが、あじわってください。その前に、万葉集の解説を書いている佐々木隆先生の話をちょっと。

◎佐々木隆先生：千年以上も前の歌も、また編者が個々の歌に添えた説明も一切の記述は漢字だけで成り立っている。昔から多数の研究者が、「訓む（よむ)」ということをしてきた。現在は、漢字かな交じりの形式で我々に提供されているが、当時は全く漢字の羅列だったらしい。
☆東の　野にかげろひの　立つ見えて　返り見すれば　月かたぶきぬ　　柿本人麻呂
☆東野炎立所見而反見為者月西渡　　わずか 14 の漢字で書かれている、これが歌だったのかと驚き。
◎人麻呂の名歌として親しまれているが、本当にこういう形の歌だったのか保証はなく、「未解読歌」に属する。我々が親しむ訓み下しは、賀茂真淵が案出したもので、それ以前は、「あずまのの　けぶりのたてる　所みて　かえりみすれば　月傾きぬ」だった。馬淵の訓みが、あまりに見事なために、疑問を残しながら、下手に手が出せぬというところだ、と先生の解説。

◎山上憶良　貧窮問答歌　写す時に間違っていたら、ゴメン。
風交じり　雨降る夜の　雨交じり　雪降る夜は　すべもなく　寒くしあれば　かたしほを　取りづつしろい　かすゆざけ　うちすすろひて　しはぶかひ　鼻びしびしに　しかとあらぬ　ひげ掻き撫でて　あれをおきてを　人はあらじと　誇ろへど　寒くしあれば　あさぶすま　引きかぶり　ぬのかたぎぬ　有りのことごと　きそへども　寒き夜すらを　我よりも　貧しき人の　父母は　うえこゆらむ　めこどもは　乞う乞う泣くらむ　この時は　いかにしつつか　ながよは渡る　あめつちは　広ろしといへど　あがためは　さくやなりぬる　日月は　あかしといへど　我がためは　照りや給はぬ　人皆か　あのみやしかる　わくらばに　人とはあるを　人並に　あれもなれるを　綿もなき　ぬのかたぎぬの　みるのごと　わわけ下がれる　かかふのみ　肩にうち掛け　伏せいおの　曲げいおの内に　ひたつちに　藁解き敷きて　父母は　枕のかたに　妻子どもは　足の方に　囲み居て　憂へさまよひ　かまどには　ほけ吹き立てず　こしきには　蜘蛛の巣かきて　いいかしく　ことも忘れて　ぬえ鳥の　のどよひをるに　いとのきて　短き物を　端切ると　言えるがごとくしもと取る　さとをさが　声は　ねやどまで　きたち呼ばひぬ　かくばかり　すべなきものか　世の中の道　世の中を　うしとやさしと　思へども　飛び立ちかねつ　鳥にしあらねば

072　安威川　180919
◎9 月も中旬に入った。さすがにあの猛暑は終わったようだが、それでも暑い。昨日一昨日に比べれば、今日は少し雲が多い、空の上は 80%ぐらいに白い雲がかかっている。ひさしぶりに IC レコーダーとカメラをポシェットに入れ安威川にやってきた。梅雨ころから、茨木の安威川右岸は通行止めになっている。洪水の際に、川の水をどんどん流すため堆積した土砂を取り除く、という工事だそうで、2 キロぐらいの区間が通行止めになっている。この 2.3 年、上流で同じ工事で通行止め、下流で橋を作るために通行止め、と重なっている。そんなわけで最近は少し遠いところから出発して走っている。そう、余談な話だけれど、暑い季節は雨が多い、夕立でどしゃ降りの雨なら河川敷はすぐに水が溜まる、水を跳ね上げて走ると靴の中まで水浸しになり服も濡れる。去年までは河川敷から土手に上がり、そこを走っていたが、土手の外側下にガードレールで仕切られた歩道らしき空間がある、そこはほとんど人も通らない、ガードレールがあるので、トラックの交通量の多い道路も危なくない、はしっことはいえ道路なので水はけがいい、といいことずくめの道を見つけた。それこそ自転車が一台とか、走る人が一人とか、そんな過疎の場所を見つけ、最近は雨模様の時はおおいに利用している。
◎白いサギがふわりと飛んで行った。安威川の河川敷にはいつもなにかが飛んでいる、「今日は　ぜんぜん　鳥がいないねえ」なんて見上げていても、なにかが飛んでいる。走っているとスピードを出した鳥の集団が川下に飛び去っていった。「あれは多分　ハト　だろう」ハトは何匹かの集団で、旋回、降下、飛び立ちなどを繰り返し、草の上で何かをついばんでいる。人を怖がらず、間近に来てもちょいと動くだけ、クッククックとざわざわ鳴く。あのスピード集団は、なにをしに、どこへいったのかな。
　2 羽のカモも飛んで行った。彼らはバタバタと足を蹴って水をはね、水面から浮上して飛んでいく。あの羽でシベリヤまで飛ぶのだからすごいね。今頃ここらあたりに居るカモは、留鳥だろう。いずれにしても安威川にいる半分ぐらいの鳥たちは、シベリアとか赤道方面とかに飛んでいくつわものどもだね。かといって、カラスやサギがも、なかなかに飛ぶのが上手い。ここの自然のなか、飛べない鳥はいないだろうね。

◎去年、一昨年、毎日のように絵にサインを入れていた。3 号 6 号といった小さい絵がどんどん積みあがっていった。こうなればもう、サインを入れることに追われ、「これでよし　できあがり」と積みあげていったのはいいが、「いざ　展覧会が始まるぞ」と分厚い束を出し、アトリエの床に並べてみてあきれ返った。「なんだ　これは駄作の束は」我ながらいふのもはばかられるが、いい絵が少なかった。それ以来反省をしている、ゆっくり描こう、じっくり描こう、いい絵を描こう、というわけで、今はその当時の半分以下、三分の一にもいかないかもしれないが、ゆっくり描いている。「じゃあ　傑作　佳作　ばかりだね」という話には乗らないぞ。絵描きはいつもいつも、今、描きあげた絵が、一番いいと思っていないことにはやっていけないですよ。
◎キャンバス作り、これがまた面白い。「ええい　じゃまくさい　また　キャンバスを作らねば」と思うことのほうが多いが、作らねば、である。描く、この作業が一番面白いが、描くためにはキャンバスが要る。絵具などの材料は画材屋で調達できるが、キャンバスももちろん調達できるが、手作りにこだわっている。若いころは誰もがやったことだと思うが、手作りの絵の具・キャンバス・オイル・紙、など一度は作ってみよう、やってみようと思ったことがあるんじゃないのかな。オレの場合、キャンバスだけは、30 年 40 年と作り続けている。若いころ、キャンバス屋に覗きに行って、麻に膠だけを塗ってあるキャンバス、“アブソルバント” なるものを一巻き買って帰って試してみたことがあった。「これなら　ちゃんとした　白のキャンバス　のほうがいいかも」と思ったことがある。何人かの方々が、今もそのキャンバスを使って描いておられるが、地肌を残す技法の人が多い。画面全体をごてごて塗ってしまう分には、アブソルバントも、白いキャンバスも、古いキャンバスの再生品も変わらない。ごてごて描き込む分には、むしろ、ごてごて下塗りがしてあるキャンバスが有効かもしれない。＜アブソルバントを調べると、油の吸収がいい　白亜質のキャンバスと出ている　膠だけは　オレの記憶違いかな＞布は、麻・綿・化繊がある。オレは綿がいいねえ、それにアクリの糊（ジェル）を塗り、そのあとに白ジェッソとジェルを混ぜて 2 回塗る、これでいい。下地は合板パネルだ、床に寝かせて描くのに都合がいい。

073　淀川-Ⅰ　220919

河内厚郎著＜淀川ものがたり＞この本は、古代から中世、近代の日本の歴史にふれながら、淀川の話が綴られている。京都の都への大動脈としての淀川、教科書に載っているような歴史がどんどん出てくる。以前にも、淀川のことを当ブログに書いたことがある。その時は、オレの育った幼少時代は淀川の土手まで 500M ぐらいのところに住まいがあった。小・中・高と通っていた学校からは淀川の土手までぐらいだった。大きな川が身近にあるというだけのことだが、それこそ毎日のように土手に上がったり、窓から芝生が張られた土手の斜面を見たり、普通の風景として眺めていた。現在の住まいは 2 キロぐらいの距離、安威川まで 1 キロ、その 1 キロ先に淀川の土手がある、毎日のように見ることはなくなったが、車で走る、自転車で走る、やはり身近である。

小学校に上がったころの思い出だけれど、自転車で淀川の土手まで行けたのだから多少はしっかりしていたころなのか、父親と一緒に行ったのか、そのへんのところはおぼろげだ。鳥飼大橋のそばの土手の上にあがってみると、水が土手の目の前まで来ている。川が全部水であふれている、泥で濁った水が左から右へ流れていた。曇り空には恐ろしげな黒雲が風に流れて動いている、長らく大雨が降ったあと、強い風も吹いたあと。普段は土手と土手の間に草っぱらやワンドが広がり、でこぼこの砂の上を進むとやっと流がある、という感じの淀川だった。その本流のそばから左右を見れば、遠くに土手の斜面が見え、葦やら草が生い茂り、「まむしに　きをつけて」とよく言われていたように、蛇がたくさんいた。その時は、対岸の土手がかすんで見え、たくさんの人が心配げに今にも溢れそうな流れを、大人はそれぞれ、祈るような気持ちで見ていたのかもしれない。堤防の一部が決壊すれば家も田んぼも水浸しになる。「大水が出た時には　対岸の堤防を決壊させる　ことになっている　枚方　寝屋川だ」というような話を聞いていたが、その話がまことしやかにささやかれていた。本当にそうなのか、お上が決めていたような話しぶりが、今となっては検証しようがない。その時の事かは忘れたが、何度か水であふれかえった淀川の流れの中、ひっくり返った黒牛が流れていくのを見たことがある。もちろんその牛は死んでいたと思う。木造の鳥飼大橋が潰され、半分流された姿も覚えている。

本の中に、淀川の氾濫、大水害の話がいくつか載っている。千年千五百年の歴史で何度か大洪水があったようだ。もっとも現在では大阪平野というけれど、千年二千年前の大阪は、ほとんどが水上の世界、上町台地あたりがぽこりんと出ていただけだとか、今オレが住まいする茨木あたりも水際の場所だったそうだ。もう何百年かさかのぼればまったくの水の中だったかもしれない。その水が淡水だったのか、海だったのか調べなければ。

この本を読んで改めて、「え　そうだったのか」と驚くことがあった。“新淀川”という言葉は知っていたが、これが明治時代に掘られた川だとは、まっすぐ海に伸びている太い流れは明治時代に掘られた流れで、毛馬のあたりから大阪城方面に曲がりくねり、今の中之島を通る流れが本来の淀川だったそうだ。今の太い淀川は、明治 18 年（1885）に発生した大洪水をきっかけに、現在の長柄付近から此花区までの 11K にわたってほぼ直線的に開削された人口の放水路。工事は M29 年から始まり M42 年（1909）に竣工した、期間は 13 年。この時に同時進行していた工事が、瀬田川洗堰、三川合流地点の宇治川を付け替え、きれいな合流になったらしい。毛馬洗堰と閘門、河口までのまっすぐな放水路の四つの工事だったそうだ。当時の竣工写真、画面が小さいのではっきりとはわからないが、出来上がった大土木工事は今の土木工事と変わらないぐらいに立派なものだ。オレが覚えている幼少時代でさえ、土木工事はほとんどが人力で、鶴嘴にスコップ、運搬にはトロッコだった。

堰と洗堰の区別は調べてもなんだかわからない。また、毛馬洗堰と言ったり、毛馬閘門と言ったり、不思議な呼び方だと思っていたが、これはわかった。直線の放水路が計画され、この放水路に流れる水を多く流したり少なくしたりする調整役が洗堰だ。この放水路と明治までの淀川本流には標高差があるようで、パナマ運河のように箱の中に船を入れ水位を調整して船を通す仕組みが、閘門だ。

074　淀川-Ⅱ　290919
◎堰と洗堰の違いは？といろいろ調べてみた。まだ専門家には聞いていない。
堰とは、「せき止める」というように、石やら土を盛り上げて水の流れを、せき止める。洗堰は堰の上を常時あふれた流れがある。江戸時代、「ここには堰だ」「ここは洗堰でないと」という風に川の各場所で考え、区別して作られたのが、明治や現代になって、古いものを改良、改装しても、その名称が使われている。現代の土木工事は鉄とコンクリートで作られ、その構造も、扉・水門などが付き、堰と洗堰の区別がつきにくい外観や構造ではないのかな。洗うという字は、堰の上部を常に越流する水が堰の天端を水洗いするということから来たのかな。

◎琵琶湖と淀川、琵琶湖には 120 本の川が流れ込み、その大量の水が流れ出す川は、瀬田川の 1 本だという。その瀬田川も地図を見ると、まっすぐ川下に向かって流れるのではなく、ぐるりと円弧を描くように大きく迂回している。いまあらためて、地図を見てその曲がり具合を発見した。大雨の時、琵琶湖周辺の人々はできるだけ早く、琵琶湖の水を送り出したい。琵琶湖周辺の人々は、瀬田川を浚渫して掘り下げることを江戸幕府に願い出た。幕府は下流域の洪水が増大することや、この浅瀬が、朝廷に献上する簗の場になっていることを理由に許可されませんでしたが、上方に（京・大坂のこと）一朝ことあれば、幕府軍が浅瀬をすぐに渡れるように保っておきたかったという軍略的な思惑もあったといわれています。明治になって、瀬田川洗堰ができ、水の流れが調節されるようになっていき、浚渫も行われた。

◎明治初年、オランダ人技師ヨハネス・デ・ケーレは、「川を治めるにはまず　山を治めるべし」という持論から、上流部の水源地砂防の重要性を説き、上流山間部で、森林植生の回復と、土砂流出を防ぐ堰堤の設置を。下流部では、堤防護岸、排水樋門を提唱した。この考えは現代でも変わらない。

◎英国公使の紀行文：幕府の大坂城は高台にあった。巨大な大坂の郊外を 1 時間近くかけ横断し、大通りにさしかかった。ひじょうに多数のきわめて秩序ある群衆があふれんばかりで、外国行使を見ようと好奇心は強いが敵意は見当たらない。淀川には立派な頑丈なつくりの 300 ヤードの橋が架かっており中央部には中之島にたくさんの家が建っていた。セーヌ川のサン・ルイ島のような感じだ。絹製品を売る店に連れていかれたが、江戸の最大のものよりまだ大きく、50～100 名の店員がなんでも敏速に取り出してくれた。翌日は、市中を四方八方に貫流している川や運河を船で回った。ベニスである。すくなくとも 100 の橋が架かっている。幅が広く、金をたくさんつぎ込んで作ってある。大坂が大阪に変わったのは諸説あるが明治のころ。

◎江戸時代、大坂の飲料水は井戸か淀川の水に頼っていたそうだ。桜ノ宮の河川水は青湾と呼ばれ、船に直接くみ上げ、各家庭に売られていた。明治 28 年桜ノ宮に浄水場ができ標高の高い大阪城内配水池から市内に供給された。次に大正 4 年に完成した柴島浄水場から配水された。

◎京都疎水は琵琶湖と京都を結ぶ運河で、計画は豊臣時代かららしい。難工事は明治 23 年に完成、水力発電、水道用水、水運は高低差の大きい部分はインクライン（傾斜鉄道）船を台車に乗せ、琵琶湖、伏見を結んだ。

◎澪標（みおつくし）は、かつての河口あたり、伝法川に、船の航路を示す標が立てられた。
◎わが母校鳥飼小の五久の坂（御厩）にあった、「鳥飼の渡し」は、豊臣時代から、昭和 50 年まであったそうだ。